



生涯の友 畑 正木君を偲ぶ

41期 落 雅美

私の生涯の友、畑正木君は2023年3月6日夜明け前74歳の生涯を静かに閉じた。

間質性肺炎と診断されながら、幸いなことに長い間つつがない日々を送っていた彼の病状が悪化したのは2020年後半頃からで、翌年2021年5月には在宅酸素療法を必要とするまでになった。この頃彼は長野県北佐久郡御代田町面替(おもがえ)に移り住んでおり、仕事上軽井沢町と東京を行き来している私は時間があれば彼の住居を訪ね診察を兼ねて会話を交わす日々を重ねた。低肺機能状態は彼から身体的自由を奪い、昨年(2022年)からはほぼベッド上での生活であったが、静かで感情を露わにしない彼の口からは愚痴や弱気な言葉が出ることは無かった。

畑正木君はRKMのOB諸兄には言うまでも無いが畑龍雄先生の長男である。

昭和36年武蔵中学校入学後バスケットボール部に入り、新津耕一君と私の3人は高校三年まで続けた。畑先生は高校のコーチとしてRKMを率い、籠球武蔵は全国にその名を知られていた。しかし、我々の入学時は黄金時代が終わりむしろ谷底のような低迷した時期であった。畑、新津、落の3人は170センチにも満た

ない身体ながら高校一年生からチームの主要メンバーになり、高校三年時は能力の高い下級生達に恵まれたこともあり東京都でベスト16まで進んだ。

正木君は高いバスケットIQを持っていた。口数が少なく練習中はほとんど声を出さないが彼は常に自分で考えながらプレーしていた。俊敏さと強靱な体力を持つ彼は、ドリブル、パス、シューティングの技術は殊更に優れそのプレースタイルは美しく私の脳裏に焼き付いている。

正木君には彼の人生の後半30年を共に過ごした伴侶、小山由紀江さんとの出会いがある。私達が現役時代畑龍雄先生はお茶の水女子大附属高校でもバスケットを教えており、正月元旦には畑家に武蔵とお茶の水の生徒、OB,OGが集まるのが恒例となっていた。我々より数年下の彼女は容姿端麗、頭脳明晰の四字熟語がとても似合う人で、国際基督教大学に進学し、その後米国生活で身につけた堪能な語学力を生かし国立大学英語科教授を務め



た才媛である。若い時代はそれぞれ別の人生を歩んでの後、ふとした縁でいつしか心を寄せ合う仲となり、以来私が知る限り正木君の人生は穏やかで幸せな日々であったと思う。

最愛の伴侶由紀江さんは正木君の容態が悪化したことで心労と身体的疲労が重なり、あろうことかコロナ感染によって通夜・告別式に喪主として列席がかなわなかった。由紀江さんは会葬のお礼の言葉を「畑正木のこと」としてしたため参列者に配布した。最期にその抜粋を彼女の言葉として紹介したい。



・・・前略。

私の恩師でもある畑龍雄先生のご自宅で顔を合わせたり、武蔵中高のコートでバスケットの俊敏なプレーを見たことはありましたが、私達が個人的に知り合ったのは30年ほど前で、私がアメリカ留学中に日米間の通信のやり方を教えて貰ったのがきっかけでした。

以来、私は単身赴任的に、京都、長岡、名古屋で仕事をしてきた為、全面的に生活を共にするようになったのは私が退職した8年前からです。2人とも旅行が好きで、彼が元気な間は20カ国を超える国を訪れました。

・・・中略。

彼は十数年前から間質性肺炎を患い結局先日それで亡くなりましたが、幸いなことに3年ほど前までは比較的普通に暮らしておりました。東京と御代田の2拠点生活をしながら、東京では音楽会や友人達との交流を楽しみ、御代田では自然の中でバスケットコートを見つけシュートを楽しみ、時にはテニスもして身体を動かしていました。ここ3年は自分たちの田んぼを得て田植えや稲刈りなど農作業もこなしていました。稲作と地元の方達との交流を心から楽しむ毎日を送っていたと思います。そして面替の浅間山を望む家をとて気に入り、終の住処と定め2年前に東京から完全に移住しました。

とても几帳面で細やかな人でしたが、動物と自然をこよなく愛していました。また、人前ではあまり自ら話をするほうではありませんでしたがお酒を飲みつつ色々な方との歓談をいつも楽しんでいました。そして時折駄洒落を言ったり、突っ込んだり、思わぬユーモラスな面も見せてくれました。

2020年11月歩くことも次第に辛くなってきた頃、御代田の友に声をかけてもらって平尾山に登りました。苦しい息の中一步一步ゆっくりゆっくり登ってついに登頂。友人達が拍手で迎えてくれました。低い山ですが本人はどんなにうれしかったことでしょう。その時畑と一緒に登った仲間への返歌として詠んだ歌です。

いざなわれ 燃える紅葉の七十路に

つまおりて幸 ともありて福

武蔵の特にバスケットの仲間、そして御代田での稲作を通した仲間、音楽会や飲み会の仲間、それぞれの皆様がそれぞれの畑との思い出をお持ちだと思います。これからも時々、畑正木を思い出していただけたら幸いです。ありがとうございました。

2023年3月10日 小山 由紀江

